

1.そもそも不登校とは？

- 小・中学校における不登校児童生徒数は346,482人
(前年度299,048人 +47,434人(15.9%)増加)
- 高等学校も同様傾向 不登校生徒数は68,770人
(前年度60,575人 +8,195人(13.5%)増加)
- 11年連続で増加し過去最多 (増加率は前年度比やや低下
(小中 R4 22.1%→R5 15.9%, 高校 R4 18.8%→R5 13.5%))
- 在籍児童生徒に占める不登校児童生徒の割合 小中 3.7%(前年度3.2%)
高校 2.4%(前年度2.0%)
- 増加の背景：児童生徒の休養の必要性を明示した「義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律」の趣旨の浸透等による保護者の学校に対する意識の変化、コロナ禍の影響による登校意欲低下、特別な配慮を必要とする児童生徒に対する早期からの適切な指導や必要な支援に課題があったことなどが考えられる (文科省)

BUNDAI

OITA UNIVERSITY

1.そもそも不登校とは？ 「不登校」の捉えは変わった →学校・授業の概念も変わる

教育機会確保法 (2016年)	休養の認可 (第13条), 学校以外の学びの場の重要性 (第13条), 「学校復帰」から「社会的自立」へ
不登校児童生徒への支援の在り方について (通知) (2019年)	「学校に登校する」という結果のみを目標にするのではなく、児童生徒が自らの進路を主体的に捉えて、社会的に自立することを目指す必要がある
生徒指導提要 改訂版 (2022年)	不登校児童生徒への支援の目標は、将来、児童生徒が精神的にも経済的にも自立し、豊かな人生を送れるような、社会的自立を果たすこと
誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策 (COCOLOプラン) について (2023年)	<ol style="list-style-type: none"> 1 不登校の児童生徒全ての学びの場を確保し、学びたいと思った時に学べる環境を整える 2 心の小さなSOSを見逃さず、「チーム学校」で支援 3 学校の風土の「見える化」を通して、学校をみんなが安心して学べる」場所に <ul style="list-style-type: none"> ・不登校により学びにアクセスできない子供たちをゼロにすることを旨とする ・誰一人取り残されない学びの保障を社会全体で実現

多様な子どもたちを念頭に、教育・学校・授業 (社会科) の在り方をどう変えるか？変えなければならない！

1.そもそも不登校とは？

不登校の子どもたちの学びの様子はどうか？

- 家庭で過ごす子ども (引きこもり傾向)
- 別室登校 (保健室, 校内外の教育支援センター, 学びの多様化学校 等)
- 学校以外の機関での学び (フリースクール, 病院, 塾 等)

担当教員の人材確保困難 (各教科担当者の未配置)
自習中心のドリル学習
カリキュラムの未消化 (学力, 資質・能力育成上の課題)
背景・意識の違い→個別対応

居場所と出番をいかに担保するか？
平山(2025)

学びの保障としてのオンライン学習への注力を

BUNDAI

OITA UNIVERSITY

不登校の子どもたちにも、各教科の目標を達成すべく学びを提供する必要

- 昨今の教育に係る様々な動向を踏まえて
- (社会的には) 市民＝主権者として資質・能力を育成する必要
- さらなる不登校を生まないために (発達支持的・課題予防的生徒指導の視座から)
- 倉石(2021)「包摂と排除の入れ子構造論」を踏まえた検討

学校において学ぶ意義・意味を感じることができる授業の提供

真正の学び (ガチな学び) に他ならない

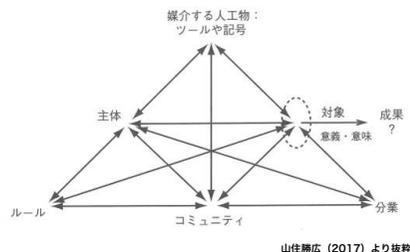
BUNDAI

OITA UNIVERSITY

2.社会科教育実践/研究の射程を拡張スル, とは?

(2)「拡張的学習」理論に依拠した社会科実践/研究の捉え直しと創造

- ・Y.エンゲストロームによる理論的・概念的枠組み:
分析・開発への援用
- ・人々の社会的実践を共同の活動システムとして捉える
- ・行為の主体性や能力を拡張するためのアイデアやツールを明らかにする
- ・拡張性=学習が指導者の手を離れて、学習者自身で方向付けられるものとなることを受け入れるということ
- ・「いまだここにはないものを学ぶ」
- ・教育の本質的な生成原理を、学ぶ者自身の自己教育の構築に見出す
- ・学びの動機は、子どもの生活の中で形成され、それを生み出す現実の生活を築いていくことによるのみ育むことができる



山住勝広 (2017) より要約

真正の学びとの親和性

子ども達の拡張的学習を促す3つの要素

①細かく線引きされた教科観の壁を越える:

「横断性」

②学びに対する行為の主体性を子どもに任せ委ねていく:

「行為の主体性の委譲」

③学校での学習を学校外の世界と結びつける:

「外部への志向性」

山住(2017)より引用

BUNDAI

OITA UNIVERSITY

2.社会科教育実践/研究の射程を拡張スル, とは?

(2)「拡張的学習」理論に依拠した社会科実践/研究の捉え直しと創造

※上部—対象を転換する, 対象に向かう活動

1 対象: 働きかける対象

→ 2 成果: 対象の拡張(変容)

3 道具: ツールや記号の人工物

4 主体: 個人あるいはグループ

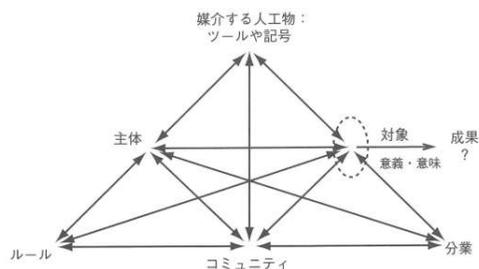
※下部—社会的な諸要素による媒介

5 ルール: 行為者を規制し, 拘束する

6 コミュニティ: 社会的・集団的活動としての担い手

7 分業: 複数の異なる諸行為の分担による遂行

※ネットワークング: 結び目づくり



【エンゲストロームによる集団的活動システムのモデル】
(山住(2004)より引用)

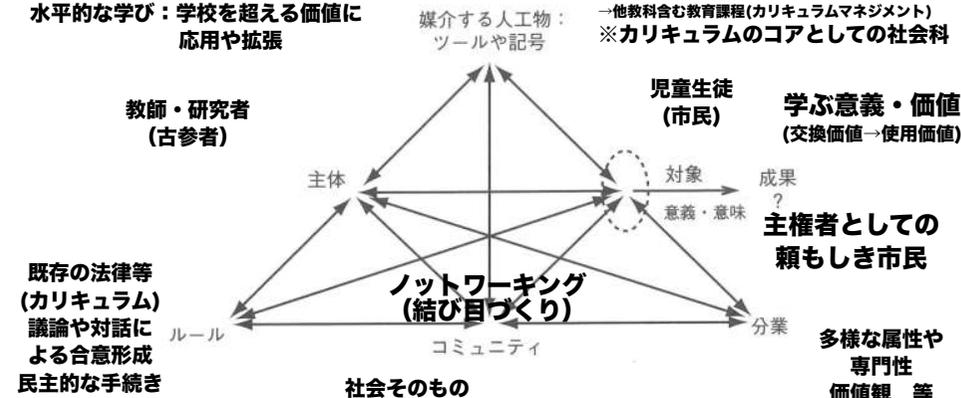
「真正の学び」を「拡張的学習」としてみると・・・

垂直的な学び: 鍛錬された探究, 知の構成

水平的な学び: 学校を超える価値に
応用や拡張

真正な学びの課題(ガチ課題)

教育資源 (教材, ICT, ヒト・モノ・コト)
→他教科含む教育課程(カリキュラムマネジメント)
※カリキュラムのコアとしての社会科



3.不登校児童生徒にどんな学びを提供するか？

(1)A市立教育支援センター(適応指導教室)を想定した学習の構想

タブレットを通じて、社会や他者とつながる社会科の学びを

【使用可能なアプリケーション (Chromebook)】

ブラウザ・メール・地図・イラスト制作・文書作成・表計算

・プレゼンテーション・カレンダー・動画/画像編集

・オンライン会議・翻訳・コンパス・カメラ

・ボイスレコーダー・計算機・数学関連 (関数・空間図形等)

・授業支援クラウド・グループウェア・AIドリル 等

BUNDAI

OITA UNIVERSITY

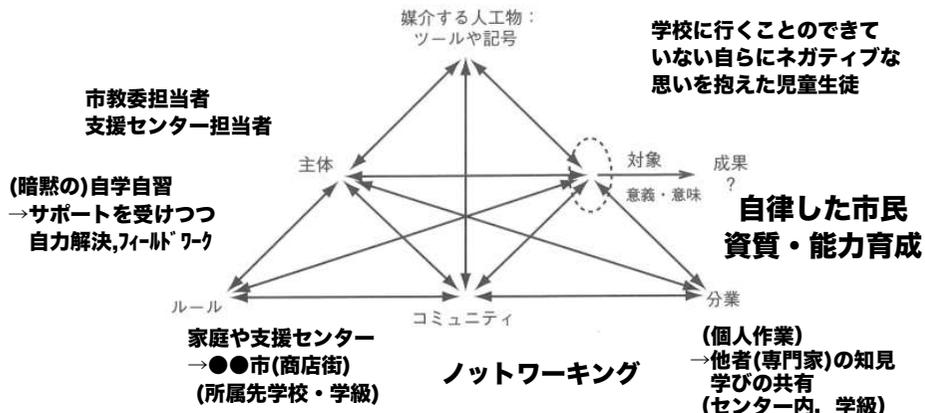
3.不登校児童生徒にどんな学びを提供するか？

(1)A市立教育支援センター(適応指導教室)を想定した学習の構想

- 一般的に、不登校の児童生徒らは、AIドリルや教科書ワーク等の基礎・基本の反復学習や作業的な課題に取り組むことが多い = 「学習のカプセル化」
- 個人のペースで進めることができ、達成感を得ることもできる。
- しかし社会科の目標、あるいは、現在の教育課程が求める資質・能力育成の観点からは、このような学習「だけ」では不十分
- タブレット端末を通して、社会そのものにアクセスし、リアルな課題を通じて、自身の生活する地域を舞台に学ぶことは、今後の市民生活にも生かせる貴重な経験となるのではないか。
- 旧友や教師との関わりを絶対的な条件としない=学習環境への心理的負荷を軽減
- 関心をもち、課題や地域にアクセスすることそのものに、学習の意義

【構想時】不登校児童生徒の学びの拡張 (の想定)

学び手の(学び)意識を自律した市民のそれへと拡張するドリルやワークによる用語習得
→タブレットを通じた概念活用
舞台としての商店街での学び



事例：地元商店街を題材に3分野・3年間の社会科学習をつなぐ

本事例のウリ (セールスポイント)

○中学3年間の社会科に関わる地域学習・探究活動

1年歴史 (次元a: 「知る」 ●●市の歴史・成り立ち)

→2年地理 (次元b: 「わかる」 ●●市がそこにできた理由, 商店街発展の経緯 ※歴史視点)

→3年公民 (次元c: 「生きる・つくる」 ●●市の飛躍のために できること, 政治参画・市民としての役割, 商店街振興策実現に向けて)



【●●市民・●●市中生としての自身を意識化するための文脈】

●●市は、福岡県第4の人口規模の都市として活力ある都市に成長しつつある福岡・北九州の中間地点にある県央で、元気なまち=人口横ばいはその成果と言えるか

ところが・・・

これまで中心地であったはずの商店街付近は、元気がない・・・

市長は、「商業施設・駅・商店街の回遊性を高め統一的発展を目指す」という

私たちの柔軟な発想でわがまちを盛り上げることはできないか？私のふるさと、私のまちの一員として・・・

そういえばあまり行ったことないな。自分で行くこともできる場所だ、ちょっと行ってみようか・・・

真に真正
手続きの真正
真正の近さ

学習課題 (3年間の社会科学学習を貫く問題意識)

『第2次●●市総合計画(2017-2026)』では、「人が輝きまちが飛躍する住みたいまち 住み続けたいまち」を都市目標として掲げており、積極的な市民の関わりが求められている。私たちはかつての先輩(中学生議会・小学生議会提案によるまちづくり計画)のように、中学生=市民としてこのまちの将来展望やアイデアをどのように提案できるか、新市長は、「商業施設・駅・商店街の回遊性を高め統一発展を目指す」という、大型商業施設の誘致や駅●●●駅前再開発を軌道に乗っているが、商店街振興については依然として課題も残る。●●●市中心商店街の魅力向上・振興プランを、●●●市・市議会・商店街連合会の皆さんとともに提案しよう。テーマは、「私たちのまち：●●●はどこから来て、どこに行くのか、行くべきか。」1次代を担う私たちの役割と責任とはいったいどのようなものだろうか。三年間の中学校社会科の学習を通して、市民としてまちづくりに参画しよう。

指導A 各学年段階(社会科3分野)における、時間・空間・社会の各軸(原方・考え方)の意識化
指導B 3年間の社会科学学習による地域課題解決を目指す学びの計画・目的意識の共有(1年生時・2年生時・3年公民)
指導C 各段階における他市町村の事例提示による、居住性・●●●市の相対化・対象化による分析・統計の促進

【活用すべき概念】※○は学び概念都市の特長可能性、市民としての政治参画(市民性、学び(知)の総合化)
(教師が教えて指す指導) どの場面・状況に? 何を? どこまで? どのように?



学びの次元I 1年歴史
M0. ●●●市はどこから来たのか?(時期)
S0. 中心商店街は、なぜ、あの場所に発展したのか?
S0. 商店街が衰退したのはいつ頃からか?それはなぜか?
S0. 歴史と伝統から見た商店街の良さ・独自性は何とどこか?どのように伝承するか?

学びの次元II 2年地理
M0. 商店街で開業される永昌会は今後、どうあるべきか?(空間)
S0. 来場者の属性、購買状況等はどうなっているか?
S0. 商店街と大型店との関係はどのようになっているか?それはなぜか?
S0. 商店街は、今後どのようにあるべきか?来場者を増やすための提案とは?

学びの次元III 3年公民
M0. 商店街の魅力向上・振興のためのプランをどのように提案(陳情・請願)できるか?
S0. ●●●市が自治体として取り組むべき課題とは何か?
S0. 商店街と大型店との関係はどのようになっているか?それはなぜか?
S0. 商店街は、今後どのようにあるべきか?来場者を増やすための提案とは?

商店街をフィールドに
課題→埋め込まれた問いへの対応を通して課題解決を目指す

次元I: 1年歴史的分野 (内容A歴史との対話(2)身近な地域の歴史)

指導1 市担当者・学芸員担当者・専門家からの情報提供を依頼する。
指導2 比較材料として、同様に旧宿場町としてその後商店街化した北九州市黒崎、直方市の事例を提示する。
【活用すべき概念】 時期・年代に着目した考察、伝統・文化の特色、エネルギー革命、市やまちの発展に尽くした先人の功績とその意義

(教師が教えて指す指導) どの場面・状況に? 何を? どこまで? どのように?

学習課題I 商店街の歴史と伝統を「広報●●●」でPRしよう! (市総務部からの依頼:中学生による広報、PR、取材、情報発信)



学びの次元I-1
Q1. 古代~現在までの●●●の歩みとは?
Q2. 市内に残存する、歴史的な遺産や伝統文化にはどのようなものがあるだろうか?(※市史資料館への聞き取り、●●●市歴史資料館の訪問)
Q3. かつての●●●や地域をよく知っている人は、当時あるいは現在をいかに捉え、どのような思いを持っているだろうか?(祖父や地域のお年寄りへの聞き取り)

学びの次元I-2
Q4. 商店街があつた場所に発展したのはなぜだろうか?
Q5. 長崎街道は、市内のどのあたりを、どのように通っていたのだろうか。また、なぜ、●●●に街道が通り、宿場町がおかれたのだろうか?
Q6. 商店街で毎年開催されている「永昌会」とはどのような催しだろうか?
Q7. 商店街を含めた中心市街地が衰退してしまったのはいつ頃からか?それはなぜか?

学びの次元I-3
Q8. 歴史と伝統の視点(時間軸)から見たときに、中心商店街のよさ・独自性とはどんなところか?
Q9. 調査した内容を、市民向けの広報記事としてまとめる時に、どのようなことを強調すれば良いか。それは、商店街の振興にどのように貢献できるか?

次元III: 3年公民的分野 (内容D 私たちと国際社会の諸課題 (2)よりよい社会を目指して)

指導1 第2次●●●市総合計画の概要を提示するとともに、市長や市担当者へ聞き取りを行う。
指導2 人口戦略会議「令和6年度 地方自治体「持続可能性」分析レポート(いわゆる「増田レポート2024」)」を提示し、人口から見た本市の持続可能性を他都市との比較により検討させる。
指導3 1年生時:歴史的分野、2年生時:地理的分野の学習成果の想起・関連づけにより、学びを継続・発展・深化させる。
【活用すべき概念】 削減可能性都市(人口からみた都市の持続可能性) 人口の自然減・社会減、民主主義と地方自治(市民参加・協働のまちづくり)

(教師が教えて指す指導) どの場面・状況に? 何を? どこまで? どのように?

学習課題III 「私たちのまち:●●●はどこから来て、どこに行くのか、行くべきか。」●●●市中心商店街の魅力向上・振興プランを、●●●市長・市議会に請願・陳情しよう! (市長・市議会への提案:協働のまちづくりのアクターとして行動化)



学びの次元III-1
Q1. ●●●市における地方自治体としての取り組むべき課題は何か?(※市長公約、第2次●●●市総合計画の分析検討)
Q2. 「増田レポート2024」におけるD-③分類は、何を意味しているか?
Q3. 他市町村に比してアピール可能な●●●市の自治体としての強みとは何か?(※地理、歴史学習の成果の活用、関連付け)

学びの次元III-2
Q4. なぜ、市政やまちづくりに市民の参画が必要か?他都市はどうか?
Q5. 市民の意見を実現するための方法にはどのようなものがあるか?
Q6. 中心商店街に視点を置いた三年間の学習(探究)成果を、市長や議会に届けるにはどのような方法があるか?

学びの次元III-3
Q7. どのような中心商店街の魅力向上・振興プランが提案できるか?それは本市の発展にいかに関与できるか?
Q8. プランの評価、検証をいかに行うべきか?
Q9. 私(達)は、本企画に関わって、どのような市民としての役割を果たしていくべきか?

次元II: 2年地理的分野 (内容C日本の様々な地域(4)地域の在り方)

指導1 消費者(近隣居住者)が商店街店舗に臨む機能や役割について、海外も含めた他都市での大型店進出による影響の事例について提示する。
指導2 持続可能性の観点から、●●●市の自然環境・人口動態・産業や流通・伝統文化といった各視点からの地域的特色を常に意識できるように、市の総合計画(マスタープラン)を提示する。
指導3 1年生時:歴史的分野の学習成果の想起と関連づけにより学びを継続させる。
【活用すべき概念】 空間的相互依存作用、シャッター街化、買い物難民(フードデザート)、消費者行動、持続可能性、地方的特殊性・一般の共通性

(教師が教えて指す指導) どの場面・状況に? 何を? どこまで? どのように?

学習課題II ●●●市商店街歳末大売出し「永昌会」の実行委員会に 来場者増加を目指す企画提案をしよう! (市商店街連合会からの依頼:中学生による企画立案、PR、情報発信)



学びの次元II-1
Q1. 近年の永昌会の状況(成果と課題)はどのようなものか?(※市議会関係者、各店舗等への聞き取り)
Q2. 来場者の年齢層、交通手段、居住地域、購買状況、売り上げ等はどうかであったか?
Q3. なぜ、商店街はこのままではいけないのか?他都市ではどうか?

学びの次元II-2
Q4. 永昌会の他都市や他商店街にない良さとは何か?(※歴史的特色の想起)
Q5. 中心商店街以外の店や施設との関連、大型店の影響とはどのようなものか?
Q6. 空き店舗はどのように活用されているか?活用するべきか?市民のニーズは?

学びの次元II-3
Q7. 来場者を増やすために、どのような工夫が可能か?(コンテンツ、イベントの仕組み)
Q8. 永昌会、商店街は今後、どのようにあるべきか?
Q9. 考察した内容を生かした、多くの市民に波及可能なPRコンテンツを作成し、広げる企画を提案しよう。

しかし、実際には・・・

- ・ 継続して登所したり、学びに向き合ったりすることが困難
- ・ そのため、単元としてのまとまりによる学習の達成はハードルが高く、単発の学習に終始
- ・ すなわち、従前の通常教室における単元による学習デザインと同じコンセプトでは対応できない
- ・ 不登校児童生徒の実態もあり、過度な負荷やストレスをかけることができないため、事前に想定していた十分な検証データ(質的・量的)を収集することができない

学びの連続性・心理的安全性・(広義の)指導の難しさ

BUNDAI

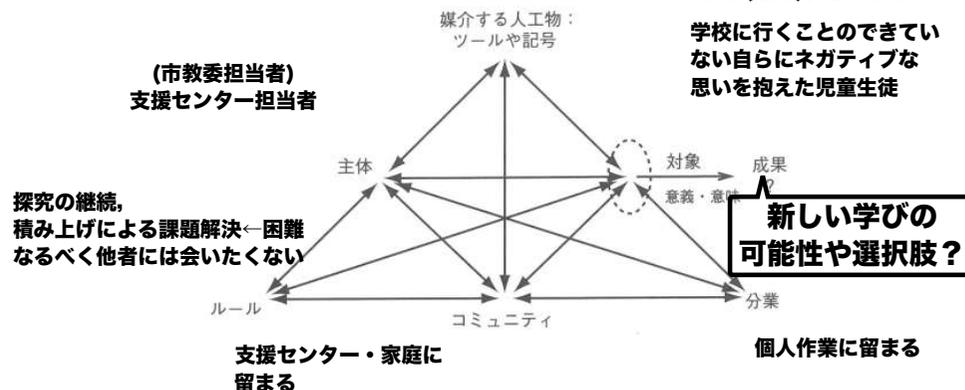
OITA UNIVERSITY

【実践】不登校児童生徒の学びの拡張???

学び手の意識を変革する=拡張には至らなかった

ドリルやワークによる用語習得に固執←タブレットは使うが・・・
概念(活用)には至らない

学校に行くことのできていない自らにネガティブな思いを抱えた児童生徒



3.不登校児童生徒にどんな学びを提供するか?

(2) 玖珠町立くす若草小中学校(学びの多様化学校)における学習の事例

- ・ 大分県玖珠郡玖珠町(小原 猛校長 児童生徒数21名, 職員数13名※10月現在)
- ・ 学びの多様化学校(不登校特例校) 2024年開校
 - 特別の教育課程編成(対話, 野遊び, 探究)
- ・ みんなでつくる「みんなが主役の学校」
 - ※ これまでの学校は全ての子どもにとって通いやすい場所だったか?
 - ・ 子どもの平均出席率75%
 - ・ プロジェクト型の学びの実践
 - ルールは必要だから作る
 - ※ 真正の学びとしての意義, 切実性, 文脈



同校学校要覧より引用

3.不登校児童生徒にどんな学びを提供するか?

(2) 玖珠町立くす若草小中学校(学びの多様化学校)における学習の事例

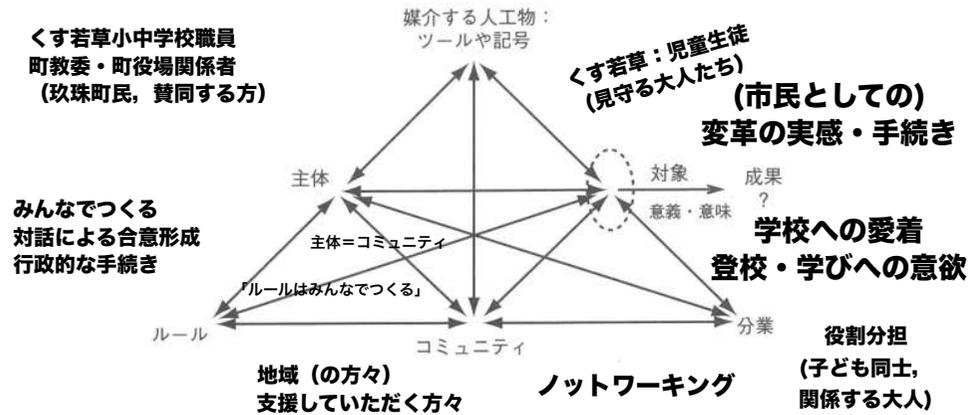
校名プロジェクト

- ・ 受験を迎える子どもたちの声「「学びの多様化学校」で受験するの?」
- ・ 学校名を変える文脈をとらえた教師
- ・ 「どうすれば変えられるのか?」
- ・ 現実の決定プロセスを学び, 参画する
- ・ 公募→選定, 各自の思いの議論
- ・ 教委会議への提案・議決→議会での議決
- ※ 校名変更

真に真正
手続きの真正

くす若草小中学校「校名プロジェクト」における学びの拡張

役場担当者の説明
タブレット



4.おわりに(本発表を通じて提案したいいくつかのこと)

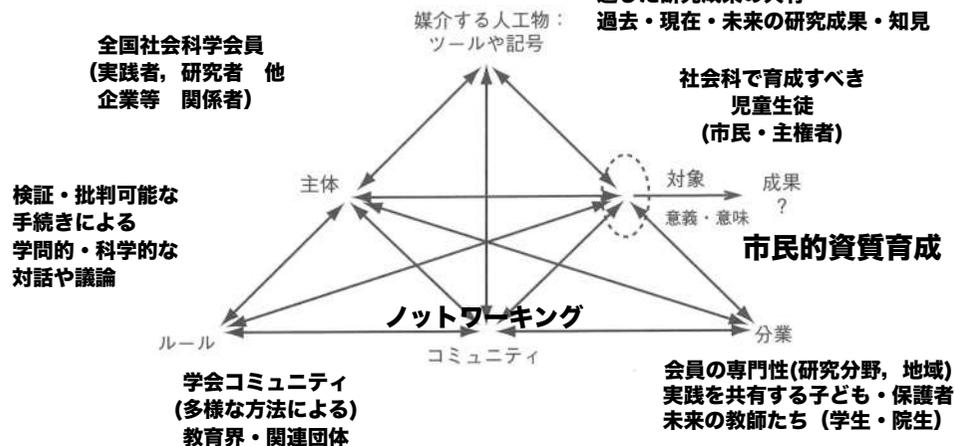
- 主権者育成における社会科の役割はますます大きくなる
- 多様な子どもの存在を前提に、教育や学校、授業の在り方も変化する必要がある(もちろん、社会科も含めて)
- 本発表では、これまで社会科教育研究/実践において必ずしも照射されてこなかった不登校児童生徒の学びを拡張的学習理論を手がかりに分析・検討してみた
- 全ての子どもに、社会形成や社会参画する真正な学びとしての社会科を提供すべき
=社会科教育実践/研究のユニバーサルデザイン化を
- しかし、従前の実践/研究の枠組みでは難しさも・・・
- 今後、“会員の多様性”を結集したコミュニティとしての推進を!

BUNDAI

OITA UNIVERSITY

不登校児童生徒のための社会科教育実践/研究の拡張とは

学会誌他 活字媒体やICTを通じた研究成果の共有
過去・現在・未来の研究成果・知見



【主な参考・引用文献】

- ・飯塚市教育委員会(2025)「飯塚市がめざす教育 No.14」
- ・倉石一郎(2021)『教育福祉の社会学』明石書店
- ・棚橋健治・木村博一編(2022)『社会科重要用語事典』明治図書
- ・田本正一(2024)『正統的周辺参加としての社会科教育の展開』春風社
- ・豊嶋啓司・柴田康弘(2018)『社会科パフォーマンス課題における真正性の類型化と段階性の実践的検証』日本社会科教育学会『社会科教育研究』135号
- ・中邑賢龍(2024)「ICT社会の中の不登校と学業不振」神村栄一・稲垣貴彦編『令和型不登校をあきらめない』日本評論社
- ・平山祐一郎(2025)「不登校34万6482人から考える」『指導と評価』1月号, 図書文化
- ・F・M・ニューマン(渡部竜也・堀田 諭訳)(2017)『真正の学び/学力』春風社
- ・松下佳代(2019)「大学カリキュラム論」日本カリキュラム学会編(2019)『現代カリキュラム研究の動向と展望』教育出版, pp.160-167
- ・文部科学省(2024)「令和5年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果及びこれを踏まえた対応の充実について(通知)」
- ・山住勝広(2004)『活動理論と教育実践の創造』関西大学出版部
- ・山住勝広(2017)『拡張する学校』東京大学出版会
- ・山田哲也(2025)「学校は「多様な子ども」とどう向き合うか」『教室の窓』東京書籍, pp.4-7
- ・Y・エンゲストローム(山住 他訳)(1999)『拡張による学習』新曜社
- ・Y・エンゲストローム(山住 監訳)(2018)『拡張的学習の挑戦と可能性』新曜社
- ・R・ハート(木下 勇監訳)(2000)『子どもの参画』萌文社

本研究は、JSPS科研 奨励研究 24H02460 の助成を受けた成果の一部を含むものです。